

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5604号  
6月号  
平成29年6月1日発行  
宮崎県  
宮崎地方気象台



## 【 予報のポイント 】

暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高いでしょう。  
前線の影響を受けやすく、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

## 【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

## 【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

### <1 週目の予報> 6月3日(土)～6月9日(金)

期間の前半は高気圧に覆われて概ね晴れますが、後半は低気圧や低前線の影響で雲が広がりやすく雨の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

### <2 週目の予報> 6月10日(土)～6月16日(金)

前線の影響を受けやすく、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

### <3 週目から4週目の予報> 6月17日(土)～6月30日(金)

前線の影響を受けやすく、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

## 普通作物

### ◆早期水稲

---

#### 1 追肥と水管理

コシヒカリの穂肥は幼穂長が1 cmの頃に行い、葉色により量を加減します。田植時に一発肥料を施用した場合は穂肥の必要はありません。水管理は根の活力を維持するため間断かん水を行います。ただし、穂ばらみ期から出穂開花期は特に水を必要とする時期のため湛水します。また、17℃以下の低温では幼穂が障害を受けるため、気象情報に注意し、低温になる場合は深水にして保温に努めます。

#### 2 病虫害対策

いもち病は収量・品質を低下させる重要病害で、昨年、一昨年と多発しました。気温が上がり、曇雨天が続くと発生しやすい条件となります。穂ばらみ期と穂ぞろい期の防除を基本に、発生を確認したら臨機防除を行います。また、カメムシによる玄米検査等級の格落ちが毎年、多発生しています。カメムシの防除は、穂揃期とその7～10日後の2回行います。地域で一斉に防除を行うと効果が高くなります。また、カメムシの繁殖場所である畦畔や周辺草地を出穂の2～3週間前迄に一斉に除草することも有効な対策です。水田内のヒエやホタルイはカメムシを誘引するので早めに抜きましょう。

### ◆普通期水稲

---

#### 1 代かきと田植え

代かき時の浮遊ゴミには、紋枯病等の菌核があるので処分します。ヒノヒカリは登熟期の高温で白未熟粒が発生しやすいので、早植えは避けます。まいひかりなどの晩生種の遅植えは出穂が遅れ低温障害を受けやすくなるので注意します。田植時はいもち病やウンカ類の予防のために箱施薬を行います。田植え後の余り苗はいもち病の発生につながる恐れがあるので直ちに処分します。

#### 2 除草

除草剤はラベルの記載内容をよく確認し、正しく使用します。ジャンボ剤やフロアブル剤は水深が浅いと拡散不十分となり、薬害が生じる恐れがあります。散布後7日間は掛け流しせず止水します。

(荒砂 英人)

## 施設野菜

### ◆収穫終了後の管理

---

今月でほとんどの施設野菜は栽培が終了します。次の栽培に向けて、ハウス内の害虫を死滅させてから宮崎型太陽熱消毒を行いましょう。

特に、きゅうりではアザミウマ類、トマトではコナジラミ類が媒介するウイルスによる被害が依然として見受けられます。

作物がウイルス病に感染すると回復は難しく、草勢の低下等により収量は大幅に低下します。これらのウイルスを媒介するのは、ハウス内に生息するウイルスを保毒した昆虫で、これをハウス外に飛散させると、近隣の雑草に寄生し繁殖するため、次作への感染が懸念されます。ハウス内の作物残渣を持ち出す前に、ハウスを閉めきり、蒸し込みを10日間程度行う等、害虫を駆除した上で残渣を持ち出すようにします。特に、ウイルス病が発生したハウスでは、蒸し込みと合わせて周辺雑草の除草を実施しましょう。

### ◆夏秋果菜類の栽培管理

---

梅雨に入り曇雨天日が多くなるため、雨よけハウス栽培のきゅうり、ピーマン、にがうり等では日照不足による草勢の低下や病害虫の発生が予想されるため、次の点に留意した栽培管理を行いましょう。

- ①通路や畦間に滞水しないように、かん水は少量多回数で行う。また、ポリマルチ上に滞水した場合は速やかに除水する。
- ②着果負担を軽減するため、不良果を中心に摘果を行う。
- ③追肥は1回当たりの窒素分量を少なくし、窒素過多にならないように注意する。また、草勢が弱い場合には葉面散布等により草勢の回復を図る。
- ④摘葉や整枝・誘引を適切に行い、過繁茂を防ぎ、通風採光を良くする。
- ⑤換気を適切に行い、葉の濡れ時間を短くする。
- ⑥集中豪雨等に備え、ほ場周辺に排水溝を掘る等、排水対策を十分に行う。

一方で、曇雨天が続いた後、急に晴れ間が出た場合は、葉やけやしおれが発生しやすくなるため、日射が強い時に備えて、寒冷紗等で遮光できるよう準備しておきましょう。

(黒木 正晶)

## 葉茎菜類及びいも類

### ◆共通（排水対策）

---

梅雨入り前には、ほ場内外の排水路の整備・点検を行きましょう。ほ場内の周辺排水路や畦と直交の排水路は排水口に確実につなげます。鍬を使って土を上げる場合、排水口からほ場内に向かって土を上げていくと、楽に傾斜をつけることができます。

### ◆かんしょ

---

トンネル栽培は収穫時期です。収穫は植え付け後100日目から可能となりますが、試し掘りを行い、芋の肥大を確認してから収穫を始めます。植え付け後130日以上になると皮色や形状が悪くなるので適期収穫を心掛けましょう。

### ◆さといも

---

トンネル栽培は収穫期です。数株試し掘りを行い、重量を計り、10aの換算収量が1トに達したら収穫を始めましょう。収穫が終わった畑は、近隣の生育中のさといもへの疫病伝染を防ぐため、発病の有無にかかわらず速やかにロータリー耕耘で残さをすき込んで下さい。畑付近の空き地に残さを放棄することは決してしないでください。

生育中のさといもは、新しい葉の展開ごとに疫病予防の農薬散布を行きましょう。

### ◆らっきょう

---

中旬までには収穫を終えましょう。土壌水分の多い時に収穫すると球の光沢が劣り、腐敗の原因になるので、晴天の続く時に収穫しましょう。自家採種をする場合は、球が完全に肥大充実してから掘り上げますが、萎縮や黄化症等の生育不良株は注意して除きます。掘り上げた球は陰干し後、ネットに入れて涼しい場所で保管します。

(杉村 幸代)

# 果 樹

## 1 常緑果樹

---

### ◆温州みかん

今年の開花は平年に比べ遅く、着花量は少ない傾向です。さらに新芽との養分競合により生理落果がやや多くなることが予想されます。着果が無いかぶり枝は、前年枝の基部から速やかに除去しましょう。

極早生温州の火山灰土壌でのマルチ栽培では、マルチ被覆の時期です。園地周辺から雨水が入らず、水はけの良い設置条件を確保しましょう。

### ◆かんきつ全般

雨が多くなると、黒点病の防除が特に重要になってきます。1回目の薬剤散布から300ミリの降雨があると薬剤の効果がなくなるため、250ミリ程度の降雨があったら次の薬剤散布を行いましょう。

6月はカイガラムシの発生時期です。上～中旬に薬剤散布を行い、密度を減らしましょう。

### ◆完熟きんかん

一番花の安定した結果は大玉生産と早期出荷を同時に実現できます。出蕾期から開花期の加温や満開期のビニール被覆を実施し、十分な温度を確保しましょう。雨天が続く時は昼間も28℃程度で加温しましょう。

### ◆マンゴー

降雨とともに、炭疽病や軸腐れ病の発生が多くなるため、殺菌剤の散布を徹底しましょう。また、曇雨天日が続いた後の晴天日には日焼けが発生する場合があります。日焼け対策の遮光ネットはこまめに開閉しましょう。

栽培期間中の過度の節水は、糖度低下や樹勢低下を招きます。定期的なかん水を実施しましょう。

収穫が終わった園では、剪定等の作業に入ります。樹齢の進行とともに着花が不安定になったり、果実品質が低下している園では改植を行いましょう。

## 2 落葉果樹

---

### ◆くり

収量確保には施肥が非常に重要なため、夏肥の施用を必ず行いましょう。特に、樹勢が落ちたり、果実が小さい園での施肥は効果的です。また、翌年の結果母枝充実にも有効です。年間施肥量の2割程度を施用します。年1回の施肥でよい肥料も開発されていますので、詳細は最寄りの農業改良普及センター等へ相談してください。

(鈴木 美里)

## 花 き

### ◆夏秋キク

---

曇雨天日が続いた後の晴天日には「葉焼け」の発生が多くなるため、循環扇によるハウス内の送風やカルシウム資材の散布、葉水をうつ等の対策を実施して下さい。

「フローラル優香」の8月出荷作型については正常な開花を促進するため、消灯後からシェード（12時間日長）を2週間程度実施して下さい。また、貫生花の発生を軽減するために、過剰な施肥は控え、適切な栄養生長期間を確保しましょう。

「精の一世」は6月10日前後が8月盆出荷の消灯日になります。消灯後に高温に遭遇すると開花が遅れるので、夜間はシェードを開放し、昼間も換気を行いましょう。

### ◆秋ギク

---

白さび病等の病害は健全な穂での親株育成、親株ほ場での予防の徹底、適切な農薬の選択等の対策をとり、本ぼへ持ち込まないようにしましょう。農薬の選択については地域の指導員に必ず相談してください。

### ◆デルフィニウム

---

夜冷育苗は早期抽だいを防止するため、本葉2枚展開時から16時間、10℃の夜冷を行ってください。セル用土及び鉢土の乾燥や過湿は生育不良や徒長の原因になるため、生育に合わせた細やかなかん水、施肥管理を実施してください。

## ◆ホオズキ

---

7月出荷作型における着色のためのホルモン処理の時期です。ホルモン剤散布はできるだけ涼しい早朝に実施し、散布前後数日は寒冷紗により遮光して下さい。

ホルモン剤散布と他の農薬の近接散布によって色ムラや薬害が発生しやすくなるので、高温時には換気を徹底し、高品質ホオズキの生産に努めましょう。

## ◆シキミ

---

梅雨時期は黒シミ斑点病の感染リスクが最も高い時期です。病害虫による被害は商品価値を低下させるので、適期防除に努めましょう。

## ◆露地花木類

---

キイチゴやヒペリカム等、過湿で根腐れしやすい品目は特に排水対策を徹底し、湿害の発生を防止しましょう。

(中村 広)

# 畜 産

## ◆家畜

---

梅雨に入り、気温・湿度とも上昇し、家畜が暑熱ストレスを大きく受ける時期になります。雨水が畜舎内へ降り込まないようにするとともに、風通しを良くするためにカーテンの開閉をこまめに行いましょう。畜舎周囲の水たまりは降雨後の蒸散時に畜舎内の湿度を急激に上昇させます。雨トイの設置は水たまりの解消につながるので有効です。

子牛の下痢対策では、敷料のこまめな交換が効果的です。下痢が発生している子牛は、他の子牛へ蔓延しないよう隔離するとともに、長靴を交換し、手指の消毒をする等、人を介して移らないように気をつけましょう。

乳牛は、暑熱ストレスを強く受ける家畜です。暑熱ストレスにより飼料摂取量及び乳量が低下するため、牛舎ファンを常に回し、牛体、1頭1頭に直接風が当たるようにしましょう。また、乳牛の場合、乳量にもよりますが1日に60～90ℓの水を飲むと言われています。新鮮な水がいつでも飲めるようして下さい。また子牛にとっても水は大事です。子牛用のバケツ等で飲水させる場合は水の交換を頻繁に行い、新鮮な水が飲める環境を整えましょう。

豚・鶏では、梅雨の晴れ間の急激な気温上昇で熱射病の多発が懸念されます。寒冷紗を設置し、直接日光を遮り、換気扇やダクト、あるいはミスト機による散水で畜舎内の温度が上昇しないようこまめにチェックが必要です。

これからの季節は、サイレージが腐敗しやすくなります。サイレージの色が黒く、手で触って熱く感じる場合、いつもと匂いが違う場合は給与しないで下さい。

また、長雨による排水不良は湿害等により飼料トウモロコシ等の生育を阻害します。ほ場周辺に排水溝を設置し、ほ場内に水が貯まらないよう注意します。

(大山 佐喜子)

## 工芸作物

### ◆茶

---

#### 1 二番茶の摘採

二番茶の摘採期は、降雨が多いため雨の影響を考慮し、摘み遅れのないよう適期摘採に努めます。

樹勢の強い茶園は摘採前7日間ほど黒寒冷紗等で被覆し、積極的に品質向上を図ります。被覆により、黒葉腐病・葉擦れ・葉焼け等が発生しやすいので、生葉品質の低下に注意します。

#### 2 摘採後の管理

二番茶摘採後の整枝は、摘採7日後頃に遅れ芽を除く程度に摘採面を整えます。本年も炭疽病の発生が多い傾向のため、地区防除基準に準じ速やかに防除を行います。

深刈り更新は二番茶後、梅雨明け時期を考慮しながら早めに古葉が残らない高さで実施します。また、一番茶後に中切りを行った園では、中切り55～60日後に中切り面より約3cm高い位置で1回目の整枝をします。

施肥は、二番茶摘採前後に地区施肥基準に準じて速効性肥料を施用します。

#### 3 チャトゲコナジラミ対策

平成26年に県内茶園で発生が確認されて以降、チャトゲコナジラミ発生園は県北を中心に拡大しています。本害虫に対する問い合わせや見慣れない虫を発見した際は最寄りの農業改良普及センター等へ連絡してください。

(黒木 清人)

### ◆しいたけ

---

#### 1 伏込み地の管理

しいたけ菌は、30℃を上回ると菌糸生長が急激に減退し、35℃以上では死滅する恐れもあります。直射日光によるほだ木の温度上昇を防ぐため、日陰が十分でない箇所には笠木等を補充しましょう。



## 2 ほだ場の管理

害菌の侵入を予防するため、梅雨に入る前に防風ネット等の撤去や周囲の雑草木の刈払い、除伐等を行い、風通しを良くしましょう。

また、倒れたほだ木や廃ほだを整理し、害菌・害虫の発生源にならないようにしましょう。さらに、しいたけ採取後のほだ木は、今後、均一にしいたけを発生させるためにも、ほだ回しや天地返しを行いましょ。

(永野 学)

### ◆たばこ

---

今月は中葉系の収穫・乾燥が主な作業となります。

- 1 収穫は適熟葉収穫に努め、「広く浅く」の収穫で着位を揃えて収穫しましょう。また、取り遅れや収穫ロスをなくし、完全収穫で収量確保に努めましょう。また、立枯病などの病害葉はクジリ取りを行い、区分収穫に努めましょう。
- 2 収穫葉にマルチ片や土砂等の異物が付着している場合には除去しましょう。また、乾葉の取ろし時にも異物が混入しないように心掛けて作業しましょう。
- 3 乾葉の取ろしに際しては、吸湿・過乾に注意して荷造りを行いましょ。また、たばこ以外の臭いの付着防止や貯蔵害虫被害防止のため、全包ビニール梱包を行い、口を養生テープ等で閉じて貯蔵しましょう。
- 4 梅雨入り前には、排水対策やほ地環境整備に心掛け、耕種的防除を徹底しましょう。また、農薬を使用する際には使用基準を守り、近隣ほ地への農薬飛散に十分注意し、使用しましょ。また、農薬使用後は野帳・使用実績票へ確実に記帳しましょ。

(宮崎県たばこ耕作組合)

### 内容の詳細について

---

6月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

## 向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	葉いもち 穂いもち	並 —	5月中旬に、県内で葉いもちの発生が確認されました。常発地や迫田等の風通しの悪いほ場では、特に注意が必要です。 今後梅雨入りとともにいもち病がさらに発生しやすくなるので、早期発見に努め、病斑が認められたら速やかに液剤等で防除します。
	斑点米カメムシ類	—	斑点米の混入が極少量でも米の等級に影響するため、例年被害の発生する地域では必ず防除を行います。防除適期は穂揃い期とその7～10日後で、2回防除を行うと効果が高くなります。
普通期水稻	葉いもち	—	補植用の置き苗は、いもち病が発生しやすく、また、伝染源となるので早めに処分します。
	スクミリンゴガイ	—	水田の水口に金網を張り、貝の侵入を防止するとともに、生息数が多い場合は捕殺するか粒剤による防除を行います。
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	やや多 並	アブラムシ類は、キュウリモザイク病やタバコ黄斑えそ病などのウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め防除します。
施設野菜	土壌病害虫 コナジラミ類 アザミウマ類 アブラムシ類	—	近年、微小害虫によって媒介されるウイルス病（黄化えそ病、黄化葉巻病、モザイク病など）が問題となる事例が発生しています。 媒介虫は次期作のウイルス病の発生源になりますので、栽培終了後は株を抜き取り、少なくとも10日間は施設を密閉し、媒介虫を死滅させてから残さを処分します。また、ほ場周辺の除草も徹底します。
いちご (親株)	ハダニ類	やや多	発生面積率、寄生株率ともに平年よりやや多の発生となっています。親株から苗に移行・増殖するので防除を徹底します。
果樹全般	果樹カメムシ類	並	県内3か所に設置しているフェロモントラップでは、平年並の誘殺となっています。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めます。 特に、ウメやナシなどの結実中の果樹類では注意が必要です。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 黒点病	並 並 並	枯れ枝は黒点病の感染源となるので除去に努めます。また、剪定枝をほ場周辺に放置していると、激発するおそれがありますので適切に処理します。
	ミカンハダニ ミカンハモグリガ アブラムシ類	やや多 やや多 やや多	ミカンハダニは生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5～1頭を目安に防除を行います。
茶	炭疽病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノボガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシカバラムシ	並 やや多 並 並 やや多 並 並 やや少	新芽生育期にチャノミドリヒメヨコバイに被害されると減収、品質低下が著しいため、萌芽期から開葉初期に薬剤散布を行います。 チャノコカクモンハマキの防除適期は、発蛾最盛期の7～10日後で、チャノコカクモンハマキとチャハマキの発蛾最盛期の差が10日以内であれば同時防除が可能です。 チャノキイロアザミウマの発生は、例年二番茶期から多くなります。多発生してからでは防除が困難になるので、早期発見、早期防除に努めます。



1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnn.ne.jp/miyazaki> です。